

学生 の 行 書 書 字 の 実 態

林 朝 子*

中学校書写で学習する行書については、ほとんど具体的な書き方の指導がなされていないのが現状である。そのため、書塾経験の有無によって書ける行書体に差が出てしまっている。しかし、日常生活においては、速書きする場面は多く、速書きによる読みやすい文字を書く能力も求められてくる。このような日常生活につながる行書に関して、学生自身がどのように認識しているのか、また、行書をイメージした場合に実際にどのように書字をするのかを楷書と比較しながらその書字傾向について明らかにした。これらの結果は、今後の教員養成課程の行書を扱う授業の内容について考える際の礎となる。

キーワード：中学校書写、行書、書字

1. はじめに

本稿は、教員を目指す学生の行書書字の実態を把握し、今後の大学における行書授業改善の礎とすることを目的としている。行書の実態調査や行書指導に関する研究は、過去にも散見されるが、学生が捉えている行書を、行書に関する認識と楷書と行書の書字比較の双方から、実態把握を行う点が本稿の特色である。

中学校書写は、現行の学習指導要領・国語の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に位置付けられ、行書指導は第一学年から行われており、次のような「目標及び内容」が設定されている（下線部は筆者による）。

第一学年

ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書くこと。

イ 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。

第二学年

ア 漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと。

イ 目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと。

第三学年

ア 身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと。

また、「指導計画の作成と内容の取扱い」では、「ア文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育て

るように配慮すること」と記されている。

指導要領で取り上げられている行書の特徴としては、「速く書く」という点であり、行書とはどのような書体なのか、「読みやすく」するために具体的にどのような運筆で表現するのか等は、教員の認識に基づく指導によるところが大きい。佐藤他 2006 でも指摘されているように、「実際の授業では、行書学習の目的が例えば芸術作品作りと取り違えられていたり、教師が行書指導以前に書写の授業を避けたりする等問題がある」のが実状である。本稿では教員を目指す学生が行書に対しどのような考えを持っているのかという点についても明らかにする。

行書は、本来であれば「最も実用的な書体」であり、「楷書の読みやすさ、草書の速書きというそれぞれの長所を兼ね備えているため、日常多く使われている」¹⁾書体である。しかし、実際の学生書字の文字には行書で書かれているものは非常に少ないのが現状である。本稿では、漢字の行書書字に焦点を当て、中学校書写で学ぶ範囲とされる行書の初歩的な書き方に関して分析を行っていく。

2. 行書の特徴と調査方法

行書の特徴は、以下の5項目に大きく分けられる²⁾。

- 1) 点画の特質：曲線的で丸みがある。
- 2) 点画の筆使い：止め・はね・払い等変化することが多い。連続することが多い。省略することがある。
- 3) 字形：楷書に準じる³⁾が、やや流動的である。
- 4) 筆順：楷書に準じる⁴⁾が、一部異なることがある。
- 5) その他の特徴：読みやすさを保ち速書きに適する。画一的でない。

*三重大学教育学部

行書は「画一的でない」と記されているように、非常に表現に幅のある書体であり、一律に行書体と括ることは困難である。本稿では、中学校で学ぶ楷書の骨組みに行意が少し加わった平易な書き方を取り上げる。

今回、学生の書字文字の分析の観点としては、1) 2) 4) の特徴に焦点を当て、特に以下の5点について取り上げることとする⁵⁾。()内は、各分析のために対象とした文字である⁶⁾。

- ①点画の変化：a) 終筆の変化（大木）
b) 方向の変化（北西）
- ②点画の連続：a) 筆脈の実線化（清心）
b) 点画の直接連続（元気）
- ③点画の省略：（秋霜）
- ④筆順の違い：（紅）
- ⑤点画の丸み：（すべての文字）

以上の観点を踏まえ、学生の文字を分析することで、学生がどのような基準で行書を考え、実際の書字の際どのような表現をしているかが具体化されると考える。

調査方法についてであるが、平成25年度後期「書道Ⅱ」⁷⁾の初回授業の最初に履修生19名を対象にアンケート調査（自由記述）と書字文字収集を行った。講義等を全く行わない段階で実施したアンケートであり、学生自身の行書に関する認識や書字方法が反映されていると判断した。事後インタビューについては、必要と判断した場合に行った。学生の毛筆に関する背景として、書塾経験についても調査を行ったところ、19名中10名が書塾経験を持ち、内7名は行書まで習った経験がある。書塾経験と調査結果の関係性については、随時触れていく。

3. 学生の行書に関する認識

アンケートの質問項目に沿って、3-1.～3-5.で回答記述をまとめ、分析を加える。なお、半角数字は該当する人数を示す。

3-1. 中学校での行書学習

中学校の書写における行書学習の経験（硬筆・毛筆）については、以下の結果となった。

	経験なし	経験あり	記憶なし
硬筆	13	3	3
毛筆	3	11	4

毛筆での行書学習は硬筆に比較すると多く行われていたことが窺える。硬筆での学習が毛筆に比べ少数であることは、毛筆から硬筆、あるいは、硬筆から毛筆という中学校書写における「硬筆及び毛筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養う」⁸⁾ことを目的とした指導が行われていたとは言い難い。

3-2. 日常生活で行書を書くか

日常生活において、行書体で文字を書くことがあるかについて質問をした。

- ・ある〔行書と意識して書いている〕(6)
- ・ある〔書いている文字が行書というなら〕(2)
- ・ない/ほとんどない(11)

「ある」については、〔行書と意識して書いている〕場合と〔書いている文字が行書というなら〕の場合がある。〔行書というなら〕という記述からは、どのようなものを行書というのか確信が十分に持てていないことがわかる。一方で、行書で書く必要性を感じているかどうかについては、今回の調査では把握できなかった。

3-3. 行書体とイメージ

行書をどのような書体としてとらえているかについては、次のような記述が見られた。

- ・くずした字(7)
- ・つながっている(5)
- ・達筆(3)
- ・速書き(1)
- ・走り書き(1)

また、行書に対するイメージについては、記述は少ないが、「かっこいい(2)」「さらさら(2)」「やわらかい(1)」「書きにくい(2)」という回答が見られた。

記述内容は、全て行書が持つ特徴やイメージを表現しているが、2.で触れたような具体的な運筆方法に関しての記述はなかった。記述内容に関して、書塾経験の有無による差はなかった。このことから、中学校書写での行書指導が具体的な行書体を認識できる段階まで十分には行われていなかったということが窺える。

3-2.の回答との関連を見ると、日常生活で行書を書くことが「ある」と回答していた学生も、行書体については「くずした字」「つながっている」等の記述のみに留まっており、行書体の細かな特徴までは触れられておらず、実際の書字の際に適当な行書が書かれているかは3-2.の回答だけではやはり判断ができない。

3-4. 「書道Ⅱ」で何を学びたいか

「書道Ⅱ」において何を学びたいかを問うた。「行書の書き方」に関する記述が15で大部分を占めた。実際の記述内容もほぼ「行書の書き方」という表現になっており、この点からも行書体の具体的な特徴や運筆方法をわかっていない様子が確認できる。3-2.で「行書を書かない/ほとんどない」と回答した学生の中には、行書の具体的な書き方がわからないため「書けない」学生もいると考えることもできる。また、その他には「中学校書写での指導法」(2)という記述もあり、教員として教えることも念頭に入れている学生もいた。

3-5. 中学校で行書を学ぶ意義

中学校で行書学習が含まれている意義をどのように感じているのかを調べた。回答記述には、学習指導要領の内容につながる点が見られた。学習指導要領との関連とともに、記述内容を見ていく。

学習指導要領	回答記述
第一学年 イ 基礎的な書き方を理解 第二学年 ア 読みやすく速く書く	字のつながり (1) きれいなくずし方 (1) 相手に伝わる文字 (1) 読める文字 (1) 速く書く能力 (3)
第二学年 イ 目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書く	書くものや書く機会の違いを理解 (1) 自分の楷書を見直す機会 (1)
第三学年 多様な文字に関心を持ち、効果的に文字を書く	様々な字体を知る (1) 大人になってから使えるように (1) 書類を書く際に恥ずかしくないよう (1)
伝統的な言語文化と国語の特質	文字の成り立ち (5) 書き順再確認 (1) 文化 (2)

「文字の成り立ち」という記述が多かったが、事後インタビューにおいて「ひらがな」の成立過程をイメージしていることがわかった。

4. 学生書字による行書文字の傾向

ここでは、2. で述べた学生の書字文字の分析の観点に基づき、学生の行書文字の傾向を見ていく。取り上げた観点以外の気づきも最後に加える。

学生にはそれぞれの文字を楷書と行書の両書体で書くよう指示をしたが、行書で書く場合には楷書に比べると「行書でどう書くのか」を考えながら、非常に長い時間をかけて書字する学生が多く見られた。

以下の分析においては、書塾経験の有無で差が見られた文字もあり、経験の有無についても記す。

4-1. ①点画の変化：a) 終筆の変化（大木）

書字例：楷書 行書

大 大
木 木

「大木」の分析観点は、右払いの二通りの「止め」、左払いの「止め」と小さな「はね」、縦画の終筆の「はね」である。

左右の払いに関しては、「大」で取り上げる。

	左払	塾有	塾無	右払	塾有	塾無
大	ノ	7	9	ノ	3	8
	ノ	0	1	ノ	0	0
	ノ	0	2	ノ	4	3

1名は「大」の文字として不適当と判断し、除外した。左払いに関しては、塾経験の有無に関係なく、楷書と同じように払って書いているのが目立つ。右払いは、7名が下向きに「止め」、「はね」を付けて書いている。この

書き方については、塾経験有の学生のほうが多く使用している。

	縦画	塾有	塾無
木	ノ	1	7
	ノ	6	5

「木」の縦画終筆の「はね」については、塾経験有の学生は6名が使用しており、自然と書けている様子が伺えた。

4-2. ①点画の変化：b) 方向の変化（北西）

書字例：楷書 行書

北 北
西 西

「北西」の分析観点は、「北」の四画目の左払いの横画への変化と「西」の四・五画目の縦方向への変化である。

	4画目	塾有	塾無
北	匕	7	11
	匕	0	1

ほぼ全ての学生が左払いのままであった。左払いが横画になる変化は行書特有ではなく、『常用漢字表』で取り上げられている許容される書き方であり、この書き方を知っておく必要がある。

	4・5画目	塾有	塾無
西	西	7	7
	西	0	4

1名は「西」の文字として不適当と判断し、除外した。「西」の4・5画目の曲がる部分の縦方向への変化は塾経験無の学生4名に留まった。「北西」で分析を試みた点画の方向の変化は学生にとっては書き方として認識の度合いが低い傾向が見られる。

4-3. ②点画の連続：a) 筆脈の実線化（清心）

書字例：楷書 行書

清 清
心 心

「清心」では筆脈が連続線として表れるかどうかには焦点を当てる。

	1・3画目	塾有	塾無	6・7画目	塾有	塾無
清	ノ	0	1	主	2	5
	ノ	7	9	主	5	7

	10・11画目	塾有	塾無
清	月	1	4
	月	6	7

さんずいの書き方については、ほとんどの学生が行書体使用ができていた。また、横画の連続線についても比較的自然的な運筆ができているようである。

「心」の3・4画目の連続線については、全学生が自然な連続線を用いて表現ができていた。

	3・4画目	塾有	塾無
心		0	0
		7	12

4-4. ②点画の連続：b) 点画の直接連続（元気）

書字例：楷書 行書

「元気」では、前画に次画の始筆が接している場合、前画の終筆部分と次画の始筆部分が一点で交わっているかどうかを確認する。

	2・3画目	塾有	塾無
元		7	11
		0	0

「元」の横画から左払いをした学生はいなかった。この流れを一画のように書くことは認識されていないようである。

	1・2画目	塾有	塾無
気		3	10
		4	1

「気」の左払いから横画への連続は一部の学生であるが書けていた。しかし、書塾経験者が多く、書塾以外での学習が少ない書き方といえる。

1名はどうしても行書で「元気」を書くことができず、空白のままであったので、除外した。しかし、「元気」の傾向を見ると、直接接続の書き方が明確にわかっていた学生は少ないと考えられる。

4-5. ③点画の省略：（秋霜）

書字例：楷書 行書

「秋霜」では、小さな点画を連続線で表したり、複雑な部分を略し、簡略化しているかどうかを見ていく。「木」の部分の省略については、「禾」で見ていくこととする。

	禾偏	塾有	塾無
秋		2	11
		5	1

「木」の部分の省略については、書塾経験有の学生は5名が書いている。「木」の省略は様々な漢字の中で扱われるため、書塾経験がある場合には学習する機会が多かったと思われる。一方、書塾経験がない学生は1名以外楷書と同じ「木」を書いていた。多くの漢字で使用が可能な「木」の省略については、学習しておくべきであろう。

	雨冠	塾有	塾無
霜		0	1
		7	11
		0	0

雨冠の4点の煩雑さを避けるために、2点ずつ続けたり、2つの点に省略を行う。しかし、4点を2つの点に省略した学生はおらず、ほぼ全ての学生が2点を連続させる表現で書いていた。

4-6. ④筆順の違い：（紅）

書字例：楷書 行書

「紅」の糸偏を省略・連続するように書く際、同じ方向性を持った画が書きやすいよう筆順が変わる。

	1・2画目	塾有	塾無
紅		2	7
		5	5

約半数の学生が省略・連続の書き方をも用い、筆順も変えて書字していた。速書きをする場合、筆順を変えて書くことで、

より書き易くなる偏や冠も多く、広く使用できるとよいと考えられる書き方である。

4-7. ⑤点画の丸み：（すべての文字）

全ての学生が、行書を書く際に何らかの丸味を出そうとしている。特に「折れ」の部分に顕著に表れる。

例：

4-8. その他

上記で取り上げた観点以外の学生書字に対する気づきを挙げる。

4-8-1. つなげて書く

3-3. で行書の特徴として挙げられていた「つなげて書く」ことが行書書字になると考える傾向も若干見られた。何とかつなげて書こうとし、結果的に字形としても、楷書の骨格部分までも判断が難しくなってしまう文字もあった。

例：

4-8-2. 接し方

行書の場合、楷書に比べると接し方に厳密さがなくなる学生もいた。中には不自然と感じられるほど離れている場合もあり、適度な許容を感じ取らせる必要がある。

例：

5. まとめと教員養成教育への課題

3. では学生の行書に関する認識、4. では実際の学生行書書字の傾向について確認した。それらを踏まえて、まとめと今後の教員養成教育における行書指導について述べておきたい。

学生の行書の認識と実際の書字を通して、中学校書写においてはほとんど具体的な行書の書き方、運筆方法について指導を受けていないという現状が見られた。また、ほとんどの学生が毛筆での行書指導があったと回答しており、毛筆から硬筆につながる実践がなされていたとは言い難い。学生の多くが日常生活で行書を用いることはほとんどないと回答しているが、行書指導が毛筆中心で行われていることが多いとすれば、硬筆で行書を書こうとする気持ちにもつながらず、結果的に普段使用することの少ない書体となってしまっている現状につながるであろう。今回の調査における行書書字においても、時間がかかったり、全く書けなかったり、書いても非常に字形が崩れてしまったりという様子からも、日常生活において行書使用がほとんどないことが垣間見れた。

また、学生の多くが「行書の書き方」を学びたいと回答しているが、具体的な書き方を学ぶと同時に、行書とはどのような書体なのかについて十分意識を高める工夫も必要であろう。単につなげれば行書になると考え、不自然なつなげ方をして書字している学生もいたように、つなげ方を知らない場合もあると思われる。「読める」行書文字を書くには、個人が自由につなげたり、くずしたりするだけでは不十分であることを強く伝える必要もあろう。行書に対する意識を高める方法として、行書体を「目で見る」機会を多く取り入れることが有効であると考え。教員養成課程の学生は、教員となることを目指しており、そのために子どもたちが読みやすいであろう楷書体で書字することに慣れている場合が多い。日常的にほとんど行書体を見ることがない状態である。目習いで行書の流れを感じ取ることができれば、実際の書字の際にも活用できるはずである。

さらに、実際の書字に関しては、書塾経験の有無によって多少の差はあるものの、全員がほとんど書かない行書の特徴がいくつか明らかになった。4-1. 左払いの「止め」や右払いの下方向におさえていく「止め」、4-2. 点画の方向の変化、4-4. 点画の直接連続、4-5. 点画の省略などについては、表現できている学生が少なく、大学授業において取り立てて指導していく必要性を感じた。点画の省略については、多くの文字で使用されている「禾」を取り上げたが、書塾経験の有無による差が大きく、子どもたちへの指導という点からすると、中学校書写指導の役割が大きい項目であろう。行書書字の技術的な部分に関しては、実際に筆記具を持って運筆すること

で、行書の運筆の流れに慣れることは不可欠である。

今回の調査を通し、学生の行書に対するイメージと行書書字の実態が一部ではあるが確認ができた。書塾経験があれば、ある程度の親しみを感じる行書であるが、書塾経験がない場合には非常に複雑な書体として感じ取られる可能性がある。今後は、学生が教員となった場合に、子どもたちに行書の意義と運筆技術を的確に伝えることができるよう、今回の調査結果を授業内容に反映していきたい。今回は19名という少人数を対象としたものであるため、今後はより多くの学生を対象に調査を継続し、詳細な傾向を明らかにすることも今後の課題としたい。

注

- 1) 『書写・書道用語辞典』pp.72-73
- 2) 『明解書写教育』p.92 参照
- 3) 同上、楷書の字形は「整正で構築的である」としている。
- 4) 同上、楷書の筆順は「原則的に一定である」としている。
- 5) 同上書、pp.94-99
- 6) 分析対象とした文字例は、同上書 pp.94-99 に挙げられている文字を取り上げた。
- 7) 毛筆の行書を扱う選択科目である。
- 8) 平成20年版学習指導要領・国語「第3指導要領の作成と内容の取扱い」イ、参照。

参考文献

- 浦野俊則・小倉欣也・宮澤正明（1989）「中学校国語免許状のための『書道（書写を中心とする）』の在り方3—行書書写力の向上をめざした授業形態の研究—」『書写書道教育研究第3号』
- 浦野俊則・松本貴子・津村幸恵・樋口咲子（2005）「中学生の書字の実態と書写の学習内容との相関に関する考察」『書写書道教育研究19号』
- 佐藤瑞穂・樋口咲子・津村幸恵・本田容子（2006）「行書の書写力の定着度に関する研究—大学生と中学生の行書の書写力の実態調査を通して—」『書写書道教育研究第21号』
- 藤原宏・加藤達成・永田作治・堀江知彦編（1978）『書写・書道用語辞典』第一法規出版
- 全国大学書写書道教育学会（2009）『明解書写教育改訂版』萱原書房